



関連の内外イベント

2025年1月28日、瀬戸内CN国際共同研究センター 第2回ワークショップを開催！

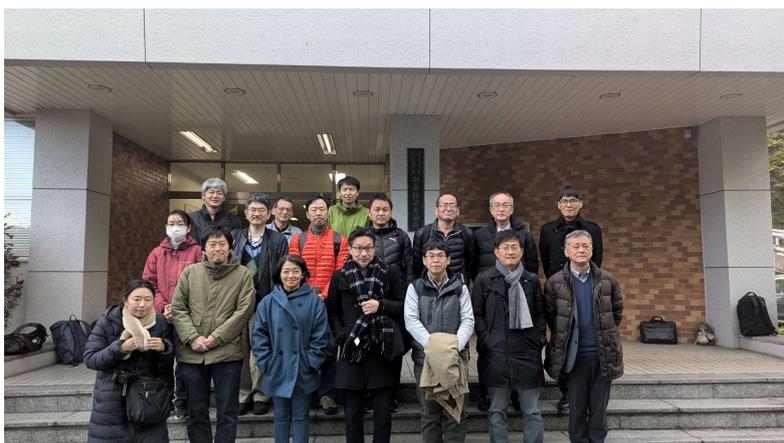
瀬戸内CN国際共同研究センターは、向島臨海実験所、竹原水産実験所、宮島自然植物実験所の3つのフィールド施設を有しています。メインキャンパスからは少し離れますが、それぞれがユニークな研究・教育活動を行っており、当センターの特色を生み出しています。今回はその中の一つ、向島臨海実験所にてワークショップを行いました。

午前中は、向島臨海実験所の施設見学を行いました。実験室や野外水槽、船などの研究設備のほか、実習室などの教育設備、さらに学生や研究者らが泊まり込みで実習や研究活動を行うための宿泊施設を見学し、臨海にある施設の特徴や特有の取り組みが紹介されました。



午後には、2024年度に当センターで公募を行い採択された融合研究支援プロジェクトの進捗報告が行われました。陸上植物や海洋生態系、エネルギー管理、有用生物活用技術、CO₂吸収生物の管理培養手法など多岐にわたるプロジェクトの発表が行われ、活発な質疑応答が繰り広げられました。

(文責 和田茂樹)



ブルーカーボンの未来を予測する

和田茂樹 教授

ブルーイノベーション部門

広島大学 大学院統合生命科学研究科

研究分野:生物地球化学

研究キーワード:ブルーカーボン、海洋酸性化、炭素循環



研究概要

研究背景

二酸化炭素(CO₂)の増加は気候変動の主要因であり、その影響予測が喫緊の課題です。一方で、海洋の生物はCO₂を吸収して海に隔離する役割を持ち、隔離された炭素はブルーカーボンと呼ばれます。

研究内容

私たちは、CO₂の増加がブルーカーボンに及ぼす影響の予測に取り組んでおり、特に海底からCO₂ガスが噴き出す海域に着目しています。この海域では、生態系がまるごと将来予測される高濃度のCO₂に曝されるため、その調査が直接将来予測につながります。

海洋生物を介した炭素の隔離過程には、光合成や有機物の輸送、分解など様々なプロセスが関わります。例えば、光合成の基質であるCO₂の増加が植物の活性を増大させることもあります。その応答は群集の遷移過程によっても異なります。CO₂濃度の変化に伴う生物相の変化は、光合成だけでなく有機物輸送や分解など炭素循環の諸過程に波及する可能性があり、ブルーカーボンの大きさの変化が懸念されます。

研究相談、共同研究など大歓迎です

〒739-0046 広島県東広島市鏡山1丁目4-4

センターホームページ:<https://s-cnc.hiroshima-u.ac.jp>

E-mail: seto-carbonneutral@hiroshima-u.ac.jp

[編集・発行]

広島大学 瀬戸内CN国際共同研究センター